令和６年度 学力向上に係る効果的な取組事例

「『令和の幸手スタンダード授業５』と『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』を目指した取組事例」

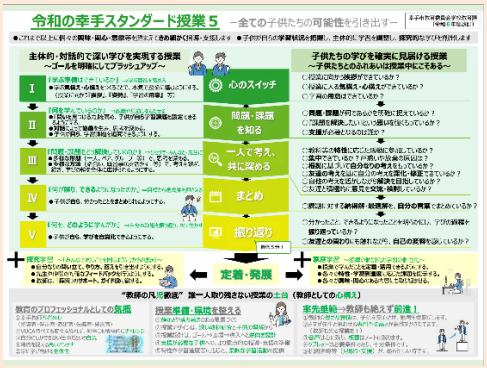
幸手市教育委員会

令和の幸手スタンダード授業５

子供たちが未来・社会を切り拓くために、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養が求められています。

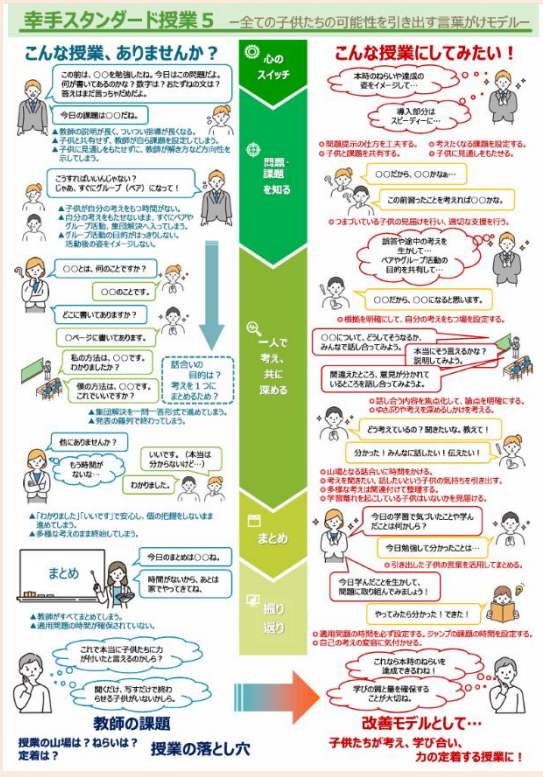
このような資質・能力は、毎日の授業の中で意図した実践を繰り返しながら、義務教育の中で育成していくことが必要です。

そこで幸手市では、教職員の授業力向上に資するため、以下の資料を作成し、授業等で活用するよう働きかけております。



令和の幸手スタンダード授業５

令和の幸手スタンダード授業５ with GIGA



言葉がけモデル

今後も、日々の授業等で、一人一台の学習者用端末の環境も活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現し、主体的・対話的で深い学びを推進し、「豊かな学びで未来を拓く」教育を目指しています。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した取組事例

事例１

○教科名　社会
○単元名　小学校第６学年「明治の国づくりを進めた人々」
○身に付けたい力

・我が国の歴史上の主な事象について、世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、文化財や地図、年表などの資料で調べ、この頃の政治の仕組みや世の中の様子の変化を考え、表現する力
・我が国が明治維新を機に欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究・解決しようとする力

○取組の工夫

・児童が教科書、資料集、インターネット検索といった多様な情報収集を自ら選択し、課題解決が図れるようにするとともに、得た情報を自身で整理しながらスライドにまとめていく活動を取り入れた。スライドはクラウド共有することで、瞬時に他者と共有できるようにした。
・児童がデジタルポートフォリオを継続的に残していくことで、児童自身が学びを振り返り、次の学びに向かえるようにした。

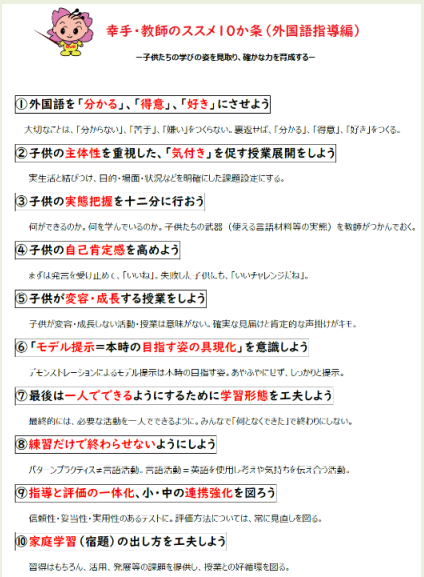
事例２

○教科名　外国語（英語）
○単元名　中学校第２学年「Program４　High-Tech Nature」
○身に付けたい力

・比較級、最上級、同等比較の文構造を理解し、自分の考えや好きなものについて話す力
・伝えたいことについてまとまりのある英文で適切な表現を用いて相手に尋ね、適切に応答する力

○取組の工夫

・「幸手・教師のススメ１０か条（外国語指導編）」をもとに、子供たちの学びの姿を見取り、確かな力を育成することに重きを置いた授業を展開した。
・学級の生徒数が 21 人という少人数指導の利点を生かし、ALT と協力しながら Program ごとに Retelling に取り組み、全員が全体の前で英語を使って発表できるようにした。
・自分の１番好きなものについて、最上級の用法を使い、工夫してペアの相手に伝えるという単元のゴールを設定することで、学習の個性化を図った。


幸手・教師のススメ10か条（外国語指導編）

―子供たちの学びの姿を見取り、確かな力を育成する―

①外国語を「分かる」、「得意」、「好き」にさせよう
大切なことは、「分からない」、「苦手」、「嫌い」をつくらない。裏返せば、「分かる」、「得意」、「好き」をつくる。

②子供の主体性を重視した、「気付き」を促す授業展開をしよう
実生活と結びつけ、目的・場面・状況などを明確にした課題設定にする。

③子供の実態把握を十二分に行おう
何ができるのか。何を学んでいるのか。子供たちの武器（使える言語材料等の実態）を教師がつかんでおく。

④子供の自己肯定感を高めよう
まずは発言を受け止めく、「いいね」。失敗した子供にも、「いいチャレンジだね」。

⑤子供が変容・成長する授業をしよう
子供が変容・成長しない活動・授業は意味がない。確実な見届けと肯定的な声掛けがキモ。

⑥「モデル提示＝本時の目指す姿の具現化」を意識しよう
デモンストレーションによるモデル提示は本時の目指す姿。あやふやにせず、しっかりと提示。

⑦最後は一人でできるようにするために学習形態を工夫しよう
最終的には、必要な活動を一人でできるように。みんなで「何となくできた」で終わりにしない。

⑧練習だけで終わらせないようにしよう
パターンプラクティス＝言語活動。言語活動＝英語を使用しながら伝え合う活動。

⑨指導と評価の一体化、小・中の連携強化を図ろう
信頼性・妥当性・実用性のあるテストに。評価方法については、常に見直しを図る。

⑩家庭学習（宿題）の出し方を工夫しよう
習得はもちろん、活用、発展等の課題を準備し、授業との好循環を図る。